

絵図② 裏書証文之覚

佐嘉御領杵嶋郡武雄六村与、大村領彼杵郡波佐見村境目之儀、
 双方より年来相論候ニ付、享保五子年……立会遂熟談、右之
 場所双方ニ塚を築、其間論所ニ差置、互ニ手懸仕間鋪旨申極：
 ……今度場所御立会御熟談之上、絵図赤白筋引之通境目相極、塚数
 拾式ッ、内舩塚三ッ、内老ッ上ニ境石相立、佐嘉御領塚四ッ、大
 村領塚五ッ、老ッ越ニ築之、委細絵図面ニ記之、双方為取替申候、
 尤、右塚相損候節者、以御立会修補相加可申候、然上者、到後々
 年少茂違変之儀有之間鋪候、為後証絵図裏書如件、

天明七年八月廿五日

波佐見村境目付百姓 折右衛門(印) 外多数

有田郷大庄屋 藤山覚左衛門殿 外多数

奥書 藩役人 署名 花押 (四名)

奥書 藩重役 署名 花押 (三名)

享保五年(一七二〇)から天明まで六〇年以上も中立地帯として
 残り、双方の利用を禁止していた地区の境界問題が解決したのであ
 るから、この時の御境絵図に記入された塚間距離は正確なものであ
 る、と考えるのは当然であろう。図2の上段の数字は、この時作製
 された御境絵図に書き込まれた間尺数を整理したものである。

三、絵図寸法の訂正文書

天明の新藩境塚を両藩役人立ち会いで築き、御境絵図を取り替し
 たことで、神六の藩境問題は全て解決したものと私は考えたが、次
 の帳面を一読したとき、思いもよらぬ記録の内容に啞然とした。

佐嘉御領神六村与大村領上波佐見村御境筋塚より里塚之間数帳③

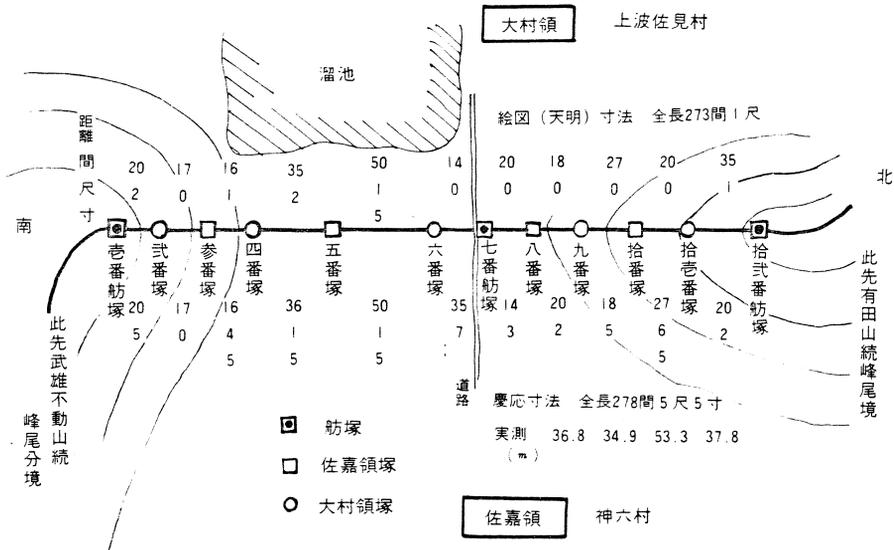


図2. 塚間寸法図

佐嘉御領神六村与大村領上波佐見村御境、先年御双方御和談之上、御境塚筋三ツ丸五ッ角四ッ都而拾式築立、絵図裏書を以御取替相成居候処、当時現塚老過ニ相成居、且又、塚より塚之間数、先年御取替之絵図面ニ廉々相違有之、何比より右塚間違与相成居候哉不指分、一躰御境筋出入ニ者、不相拘儀ニ候得共、其儘差置候而者、後々御互ニ疑惑之筋ニ付、御双方立会ニ而過塚、扱又、塚より塚之間数絵図面与現地之違目、取調子候処左之通、

附リ、曲尺六尺五寸を沓間ニ、老尺者六寸五分之積リ、

この間数帳を整理してみると図2の下段の数となるが、とくに目惹く部分を書き出せば、

一、四番丸塚（間数は五番塚との間を示す、以下同じ筆法）

此間絵図面ニ三拾五間式尺与書載相成居候得共、現地三拾六間老尺五寸有之候、此四番より五番之間、過塚老有之候得共、御申合を以此筋取除不及、其儘致置候、

一、六番丸塚

此間絵図面ニ拾四間与書載相成居候得共、現地三拾五間七尺有之候、

一、拾老番丸塚

此間絵図面ニ三拾五間老尺与書載相成居候得共、現地式拾間式尺有之候、

慶応四年辰四月廿五日

四 現地の実測と疑問点

図2の上段下段の間数を比べてみると分るように、その間数の余

りの違いに驚いて神六の現地に飛んで調査してみた。当時の道路を拡張して作った現在の県道の南側は、畠地であつて塚は一個も残っていない。北側は急斜面の山腹で、八番塚から拾式番塚まで五塚が全部残っている。一辺約一七〇センチ角に築かれた三段の石垣の上に、高さ五〇〜一〇〇センチ、三〇〜四〇センチ角の石柱、あるいは細長い自然石が建てられたものである。

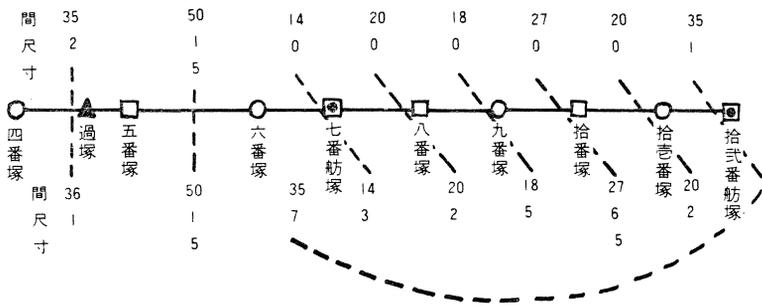


図3. 絵図の寸法ずれ

表 1. 天明・慶応の 1 間の換算表

塚 間	実 測 距 離	換算天明の 1 間	換算慶応の 1 間
12 番塚～11 番塚	37.8 m	1.08 m	1.86 m
11 " ～ 10 "	53.3 m	2.66 m	1.90 m
10 " ～ 9 "	34.9 m	1.29 m	1.86 m
9 " ～ 8 "	38.6 m	2.15 m	1.90 m

この現存している八番塚から拾式番塚までの塚間距離を実測してみると、慶応の記録とほぼ一致していて、慶応の記録の正しいことが分つたが、念のため実測距離を基準として天明、慶応の一間を逆算してみると、表 1 のようになり、数的に慶応の記録の正しいことがはっきりする。

全長において天明絵図は二七三間一尺、慶応記録は二七八間五尺五寸となり、約六間の誤差（二・二%）を生ずるが、山腹の急斜面、八〇年間の土地の凹凸の変化、水繩、尺杖の使い方等を考慮に入れると、この位の差が生じたのは止むを得ないだろう。問題になるのは、各塚間距離において差が余りにも大きく、簡単に測量の間違いとは考えられない点であり、その個所が一一個所の塚間の過半数を占める六個所にも及んでいることである。

両藩役人立ち会いで築いた塚であるから、両藩の外交関係を考えるといそかに前後に移動させることは不可能であるし、左右に動かしても「御境筋出入ニ者、不相拘儀」となつて無意味な作業となるから、動か

す必要などあるわけがない。塚が動かせぬとすると、絵図面の記入間数が最初から狂つていたと考へざるを得ない。四番塚と五番塚の間に過塚が存在するのは、立ち会いの上で築いた塚では勿論あるまい。何故、こんなことになつたのであろうか。

五、原因の追及

享保五年（一七二〇）以来六〇年間も中立地帯として残さざるを得なかつた紛争地帯を、やっと合意しての分割である。双方役人立ち会いで地形を見ながら筋塚、佐嘉領塚、大村領塚を築く位置にまづ木杭を打ち、間隔を計つて下絵図を作製した筈である。間隔を間違える等ということは有り得ない。それなのに、絵図の記録と現物の間隔が違つていた所に問題がある。

図 2 の上段下段の数字を比較して注目されることは、①七番塚より六番塚までは山腹も平地も良く間数が合っているのに、七番塚より拾式番塚までは全部がかなりの違いを示していること、即ち、六番塚を境いとして左右が全く違つた傾向を示している。②七番塚は重要な基準になる筋塚で道路脇にあり、立ち会い役人も主としてこの道路上に居たと思われ、六番塚との間隔が極端な違いを示していることである。

この注目すべき七番塚、六番塚を中心にして図 2 を眺めているうち、六番塚から拾式番塚までの塚間距離を絵図面に転記するとき、ずらして誤記してしまつたのではないか、との疑問を持つた。図 3 の点線の如く上段下段の数字を斜に比較した場合、その間尺数はほぼ一致して、最大の差のある場所でも三・五%である。慶応の測量は念入りにやっているので、かえつて誤差の数字は大きくあらわれ

るから、完全に一致する数字と考えて良い。

塚間距離は正確に下絵図に記録されたのに、外交文書である裏書証文付御境絵図は、間違つた間尺数を記入したものが交換されたのである。正副四つの絵図が皆間違つていたことになる。絵図方役人の何かの手違い——下絵図から本絵図に間尺数を転記する時の読み合せて勘違いがおき、ずらして誤記してしまったのだ、と考える以外に説明できない。このように重要な記録を同じような勘違いで作製し、問題をおこした例がある。

五島藩と平戸藩が共同管理して、物成を一对三の割合で分割している土地（三方領）があるが、平戸藩が五島藩領の島を三方領と感違ひして、元禄一二年（一六九九）五島藩に無断で測量するという主権侵害をおこして五島藩から抗議を受けた。

五島藩より平戸藩への書簡^④

……御返答ニ申来候ハ、正保四年繩張之帳面ニ、四歩一嶋と御座候へ共、手前ニ有之候ハ写ニテ御座候、本書見合追而可被申越由、其後書状を以被申越候ハ、四歩一嶋とは本書ニ無之候間、（五島藩の）源之承覚之通ニ而可有御座、とばかり申參候……

この事件は明らかに、平戸藩絵図方、記録方役人の勘違いの誤記からおきたものと言わざるを得ない。

佐嘉藩と唐津藩境の、笹原峠の藩境石を絵図で調べたところが、正徳三・四年（一七一四・五）享保初期（一七一〇年代）の多久家^⑤の御境絵図には自然石の境石が書かれている。嘉永六年（一八五二）の佐嘉藩の多久郷図^⑦には卵形の自然石が書かれている。然るに、天保二年（一八一九）頃作製と推定される唐津領内図（佐嘉

藩写）^⑧には、角柱の藩境石が書かれている。調査の結果、唐津領内図が間違っていると推定できる。作図者が標識の形を想像で画くという、作図の基本を無視した結果の失敗か、佐嘉藩絵図方役人が写図したときの写し違いか、いずれかである。

神六の御境絵図の場合も、余りにも初歩的な失敗のため監督者にも、裏書した数十人の誰にも気付かれずに交換されたのである。

四番塚は大村藩、五番塚は佐嘉藩が築いたのにその間に過塚がある。この謎を解く参考になる良い例がある。

神六の場合と全く同じような経過で佐嘉藩と平戸藩が「其間互ニ相論候処、今度遂和談、立会致見分境印塚三拾九ヶ所」を築いて新境界が決定した際の、享保一七年（一七三二）作製の裏書証文付絵図^⑨があるが、この絵図には佐嘉藩の旧主張線、平戸藩の旧主張線と共に、新境界線が赤白線で書かれている。新境界線と主張線とが交わるところに、偶然かも知れないが境塚が築かれている。

神六の新境界線が佐嘉主張線、大村主張線と交わったところに旧境塚が築かれていたとするならば、下役、庄屋、村役人、人夫達は塚が多い方が越境紛争がおきにくくて良い、と考えて塚の取り除きを中止したと考えられる。

当時、神六近くの大野原高原で大村藩の百姓の、藩境線を越えての馬草盗伐から両藩最大の藩境紛争がおこっており、それを見聞している彼等が気をきかせて旧塚を残したとしても、責めることはできない。監督の任にある上役が塚を撤去させるか、旧塚が一つ残っていることを記録しておくべきだった。それを怠つたことが過塚の存在と、塚間距離の間違つた記載との間に重要な関係があるかの

如く誤解され、後年問題を不思議なものに思わせたのである。

全ては両藩主席立会役の怠慢と断定せざるを得ない。

六、藩と明治維新

この事件より僅かに八年前の万延元年（一八六〇）、両藩の他の地区で藩境塚の紛失事件がおきたが、簡単に解決した記録がある¹⁰。数年の間に、何がこれ程両藩の態度を変化させたのか。

慶応四年正月三日、鳥羽伏見の戦がおこったさい、大村藩は官軍として大津に出兵している。一日には徳川慶喜追討令が出され、旧幕領は新政府の直轄地とすることになり、早くも一四日には長崎奉行河津祐邦は任地を抛棄して海路江戸へ逃げ帰り、筑前・土佐・薩摩・佐嘉・大村、外西南各藩は長崎奉行所を収めて長崎會議所と称して事務を取り、一八日にはその旨長崎港の諸外国領事に通知している¹¹。大村藩が小藩とはいえ官軍として、当時九州第一の重要な役所であった長崎會議所に委員を出し、ついで長崎を重視した新政府が九州鎮撫総督を長崎においた時、藩主大村純熙は長崎取締、藩士楠本平之丞は総督参謀となった¹²。この地位によつて日本の現状や、海外の動向の情報を豊富に得て、大村藩主脳は日本が如何なる道をたどるかを分析し、政変に生き残るために全力を投入していた筈である。西国の小藩として唯一の生き残る方法である。

一方佐嘉藩においては、藩主鍋島直正は若くして西洋文明を取り入れて軍事、経済の改革を行い、国産初の蒸気船を造り、自藩鑄造の鉄製砲で長崎港を防備する等、日本最強の軍備を誇つたが、常に親幕的で時勢の流れに乗れず¹³、それに不満な勤皇派の武士の内、長崎の英学塾に学んでいた大隈重信・副島種臣は慶応三年三月、長

崎より京都へ脱藩して活躍した。鳥羽伏見の戦に大勝した新政府は四年二月、佐嘉藩に北陸道の先鋒を命じて強力な佐嘉藩の武力を利用しようとし、三月には直正は議定に、副島は参与に任ぜられた。

大隈は参与と職外国事務局判事として長崎勤務を命ぜられ、長崎の外交を牛耳った¹⁴。

両藩共情報を豊富に得るに困らぬ立場にあったが、時勢の流れと国家の変遷——政体書制定（副島種臣記草）、版籍奉還、廃藩置県等を予見できた両藩の武士達が果して何人居たであろうか。

徳川慶喜の大政奉還が江戸に伝えられた時、ほんの一部の指導者を除く幕臣の大部分は、只自己の俸祿の減るのを気づかずに過ぎなかつた¹⁵。のとは逆に、將軍に代つて天皇が親政した時、藩が無くなると考えるどころか、幕領と佐幕藩領が没収されて、戦後の論功行賞が行われる際に、王政復古に尽くした藩の功績の程度により封土が拡大されるものと考え、それに伴う自己の栄達を夢見た者が殆ど全て¹⁶ではなかつたらうか。両藩の指導者をはじめとして、まず、「藩」以上の考えに達する者はなかつたらう。

その封土の拡大を期待した藩重役から、現在の封土である藩領域の再点検を命ぜられた御境目方役人が、神六の御境絵図を片手に検査した結果、思いもかけぬ絵図と現塚の寸法の違いを発見して驚き、報告を受けた藩重役は、維新の動乱期のために原因を追求する時間的余裕はなく、藩境の確認は急務ではあり、大あわてで両藩談合のうえ訂正文書を作製し、その交換によつて問題を解決しよう合意したに違いない、と私は思考する。

七、あとがき

佐嘉藩と大村藩の、慶応四年の藩境絵図の間違い問題を追究しているうちに、手書彩色で尺寸まで記入した丁寧な絵図にも、多くの間違いがあることが分った。絵図を見る場合に注意せねばならぬ点である。

薩長に限らず、官軍諸藩の指導者や重役の多くの勤皇討幕についての本音は、天皇親政の実現よりも、論功行賞により関心を持っていたのであるまいか、との疑問が私の考えから消えない。

注

- ① 古賀敏朗「佐嘉大村藩境の神六藩境塚の謎」西日本文化 一一一―号 一九七六
- ②③ 長崎県立図書館蔵
- ④ 松浦史料博物館蔵
- ⑤ 佐嘉藩家老大配分二一七〇〇石 笹原峠は多久領境にある
- ⑥ 多久市立図書館蔵
- ⑦⑧ 佐賀県立図書館蔵
- ⑨ 平戸領志佐田野原村と佐賀領筋絵図 松浦史料博物館蔵
- ⑩ 為取替一札井塚帳 長崎県立図書館蔵
- ⑪ 大仏次郎『天皇の世期』朝日新聞社 一九七二 九卷年表
- ⑫ 瀬戸精一郎『長崎県の歴史』山川出版 一九七三 二一―八頁
- ⑬ 城島正祥『佐賀県の歴史』山川出版 一九七二 一六〇―頁
- ⑭ 滝口康彦『佐賀県歴史散歩』創元社 一九七三 一八五―頁
- ⑮ 小西四郎『日本の歴史』一九卷 中央公論社一九六六 四八〇―頁
- ⑯ 井上清『日本の歴史』二〇卷 中央公論社 一九六六 一五八―頁

〔文献紹介〕

谷岡武雄著 聖徳太子の榜示石

「ほうじいし」という名称を聞くのは久しい。筆者（紹介者）がそれを最初に聞いたのは、確か一九四七年の夏、著者谷岡先生の揖保川・夢前川・市川流域の条里調査に畏友西田政義氏と同行した際であった。その頃、筆者はまだ地理学を専攻しようとしていた学生である。条里遺構の阡陌の畦畔を歩きながら、著者から榜示石の説明をいろいろと聞いた。それからはや三〇年になる。その時の著者が紹介者である筆者に歴史地理学への一つの道標を示して下さった。今も変りはないが、著者の孜々とした学究的態度、エネルギーな行動、それに古代世界への憧憬は深く、分析は明晰であり、その方法は精緻で手際良い。それらに魅せられたのは筆者だけではなからう。著者の数多い著書が、それらを物語るが、本書もまたその一つである。そのいずれの頁を開いて読みはじめても、未知の古代世界へと誘われるであろう。著者は調査において常に細心の注意を払い、一木一草、路傍の石に至るまで、限らない古代への夢を求める。これが本書である。一つの石がこれ程までに古代世界を展望するレンズの役割を果たすとはわれわれは想像もしなかった。まさしく和製シャンポリオンである。その石に関心を抱いてから、三〇年にして一つの著者に集大成するという著者の慎重な態度にも好感がもてる。

著者の榜示石の夢は、筆者にも大きな刺戟を与えた。筆者は卒業